

登山学校レポート（第7回マルチピッチクライミング講習）

氏名（南家弘毅）・所属会（福岡勤労者山岳会＝愛称・福岡アゼリア山の会）

日程：11/11（土）～11/12（日）

登攀ルート：比叡山南面 TAカンテ、3KNスラブ

パーティー編成

A：坂井・藤本・安部・横山

B：高野・田中英・宮島・南家

C：田中政・川原・河野

D：松山・佐藤・手島

E：山中・末松・古賀

レポートテーマ「マルチピッチクライミング初心者のココロ」

クライミング講習最終回である今回の内容は、これまで教わってきたロープワークの基礎とシングルピッチクライミングの基本を生かした、マルチピッチクライミングの実践である。本来ならレポートの中心テーマは、マルチ実践を通して分かった技術の習熟度（拙さの反省）や安全確保の重要性の再確認であろう。だが、テーマ設定がないのをいいことに、初心者クライマー（私自身）のクライミング各場面での心理状態という、ずっと関心のあったことを主題に据えてみた。

■視覚印象との落差

11日朝、比叡山南登山口駐車場に一番乗りで到着。同乗者2人と、そそり立つ巨大な南面岩壁を遠目に見上げる。だじろいだ。

「軽く150mはありそうな岩壁にへばりついて登り上がるなんて、初心者の自分にできるとは到底思えない。150mって、マンションの40階くらいじゃなかったっけ…」

八女津媛には計3回行った。登山学校、アゼリア内の岩登りグループ、田中政講師の自主練で、緊張に震えつつ少なくとも2ピッチ（約60m）登ることができ、わずかな自信は芽生えていた。だが、八女津媛を「怪人」とすれば、目の前の巨壁は「怪獣」だ。携帯する武器（手と足）が強化されたわけでもない。経験した岩壁と目の前の岩壁のスケールの落差に愕然となった。視覚印象にのまれていた、と言える。

全体ミーティング後、各班に分かれて南面の取り付きに到着。入隊したての科学特捜隊員が、眠りこけて動かない怪獣の尻尾を前にしたような心境だ。小さい武者震いも起きた。

TAカンテルートの1ピッチ目。ルートの少し左側の基部から登り始める。花崗岩の岩肌の感触を手の指先とクライミングシューズのつま先で確かめながら、一手、一步と上がる。

「この怪獣は意外におとなしいんだ」

岩壁の全体像が見えないことから目の前の壁に集中でき、冷静さを取り戻すことができ

た。1ピッチ目の手詰まり場面の前までは—。

■開き直りという推進力

岩の凹の位置で手がかりがなくなる。先行した班の仲間たちが難儀していた位置に自分も達したのだ。やむなく外に飛び出しているカンテ部分に身をせり出す。手や足をどう使ったかよく覚えていないが、岩の凸部分に体をもっていく瞬間に勇気がいった。いや、勇気というより開き直りか。

先に進めず立ちすくむ時間が長ければ長いほど、腕力や握力が消耗する。音のしないカラータイマーが点滅しているのが分かり、ピンチが迫り来るのを肌で感じる。凸部に身をさらすことで場面転換し、窮地を脱出するしかないという開き直りの感じ。

そうやって、手強いとされた1ピッチ目の終点でセルフビレイを取る。一息つくると、巨壁はもう怖い存在ではなくなっていた。むしろ、2ピッチ目以降のルートにどんな難しさが待ち受けるだろうか、「かかってきなさい」といった好戦モードに入っていた。

素人考えだから間違っているかもしれないが、クライミングはピッチの途中で逆戻りするのを原則想定しないスポーツとみている。セカンドの経験しかないから言えるのだろうが、登れない状況に直面したとき、もし数メートル落ちたとしてもビレイヤーからロープで止めてもらえる信頼感がある。正確に言えば、信頼感以外にすぎるものがない。その、もやとしたセーフティネットに賭けて登る開き直りが、上に進むのに不可欠なのではないか。

■笛合図の有効性に驚く

TAカンテは「1-2-1」システムで登った。私は3番目の登攀。4番目の宮島さんのビレイをずっと任された。4ピッチ目だっただろうか、ピッチ間が長く左に曲がったルートの先に支点が構築されていたため、下が見通せない状況になった。

宮島さんとつながったロープを引き上げると、ほどなくしてロープが張られた。だが、「ロープいっぱいです」の声は聞こえない。ロープが岩角に引っ掛かり、引き上げられなくなっているのか、単に宮島さんの声が聞こえていないだけなのか判断がつかない。何度も大声で呼び掛けたが応答は返ってこない。そもそも自分の声が宮島さんに届いていないのかもしれない。困っていると、近くにいた一般のクライマーさんまで親切に「ミヤジマさーん」と通る声で呼んでくれた。結局、ロープが緩んできたため登り出したことが分かり、宮島さんは無事に上がってきた。だが、クライマーとビレイヤーとの間で意思疎通ができない不安な状態が発生し、その時間が長かったという課題を残した。

2日目朝までに、声が届かないのを笛でカバーすることにして、メッセージと笛の合図を決めた。「OK」はピーピー、「待って」はピッピッピッ。シンプルな方がいいだろうと2種類にとどめた。

3KNスラブでは登攀順番を宮島さんと私で交代。笛サインも活用しうまくいった。ところが、私の登攀中にロープが緩むことが数回あり、「ロープアップ」と声を上げて張られ

ないシーンがあった。笛サインの「OK」「待って」では伝わらない。2種類では足りなかったのだ。「ロープアップ」をピピピピとして、3つ目のサインを設けた。次のピッチから登攀中にピピピピと鳴らすと、上からピーピーと返ってきた。安心して登れた。山の中でリズムや音色を変えて鳴き交わす鳥（シジュウカラやカラス）たちの気持ちに共感できた。

■自分を救う柔軟性

子どもの頃からずっと体に柔軟性がなかった。半年前にクライミングをかじり出して、それが致命的な弱点であると痛感している。2日目に登る3KNスラブの方がTAカンテよりちょっと難しいかな、と講師たちは口をそろえる。不安を小さくするには自分の武器（手と足）を少しでも強くする以外にないのだが…。

2日目の出発前、クライミング絡みで体の柔軟性の話を以前していた佐藤講師に、どうしたら体が柔らかくできるか今後の参考のため聞いてみた。すると、泊まった公民館の板張りフロアに移動し、簡単にできるストレッチを4つ、5つ教えてくれた。特に、尻について座り、足裏を重ねて膝を開き、両手で両膝を外にぐーっと長押しするシンプルな股関節柔軟法を繰り返してやってみた。心なしか股関節の可動域がちょっぴり広がった気がした。

3KNスラブは、自分に合った手がかり足がかりを見つけることを求めてくるルートだった。足がかりに体重をかける際、1日目よりも体がスムーズに動いた。使える足がかりの対象範囲が広がったという感覚だろうか。岩への慣れもあると思うが、朝のストレッチが効いたと信じている。たかだか15分ほどだったのに。根っから体の硬い自分には効果がないと半ば諦めていたストレッチを、日常生活で取り入れることにした。『オガトレの超・超・超かたい体が柔らかくなる30秒ストレッチ』という本のメニューを地道にこなしている。武器の強化（筋力と柔軟性）は必ずできると信じて。

■ノーマルなロープさばきはマナー

3KNカンテの4ピッチ目終点で、ロープさばきのまずさから10分近い時間をロスした。先に登る宮島さんと後続の私がつながったロープをさばいた際、宮島さんの上とつながっているロープが絡まってしまったのだ。キンクを解くのに四苦八苦しした。講師お二人は5ピッチ目終点ですっと待機している。ハーフロープ2本を同時に扱っているわけでもないのに、このざまはさすがにまずかった。

クライミングでキンクは避けて通れないかもしれないが、キンクさせない工夫や小技を覚えるのは、クライミングにおける大事なマナーの一つとも感じた。

これまでロープはアゼリアの先輩から借りていたが、今回、マイロープを買って比叡山デビューを果たした。「(キンクしやがって) 困ったやつだ」と冷たく接するのではなく、「あらあら、キンクしちゃったのかい。苦しくないようにすぐにほどいてあげるよ」と愛情をもって接していきたい。

この2日間は、得るものがめちゃくちゃ多いマルチ実践となった。

登山学校レポート（第7回マルチピッチクライミング講習）

氏名（横山淳子）所属会（アゼリア山の会）

日程：11/11（土）～11/12（日）

登攀ルート：比叡山南面 TAカンテ、3KNスラブ

パーティー編成

A：4名

B：4名

C：3名

D：3名

E：3名

レポートテーマ 自由記載

マルチピッチクライミング時必要な項目

装備と取り扱い方

パートナーとの掛け声

ロープワーク

支点構築

懸垂下降

マルチピッチ時注意した点、指摘された点

トポでルートの確認

ショートルートとの違い

確認は全員で行う

声を掛け合う

セルフビレイ取り方、テンションかける、解除のタイミング

クイックドロアのロープを外す

ボルトの強度

ロープの流れ交差

ロープの置き方、渡し方

水分補給

時間配分

自分の能力と岩場のグレード

落石、装備の落下

カラビナの掛け方、動き、ゲートの向き、岩との摩擦

ロープ掛け替え時ロープの向き

天候と衣服の調整

ビレイ時のロープ引き上げとロープの置き方

危険な行為

支点構築の確認

感想

比叡山マルチピッチクライミングではご指導のもと無事終了点まで到達する事が出来た。

またこれまでのクライミング講習も合わせて、基礎知識の習得から実践まで行い、安全なクライミング技術を学ぶ事が出来た。この知識を身近な仲間、会の会員に伝えていきたい。また伝える事で自分自身の知識の定着に繋げたい。